2024年10月10日

長野県言語聴覚士会ミニ研修会

その子にとって自然な話し方を守り、育てる

～私たち言語聴覚士が、吃音のある人とその家族のためにできること～

東御市民病院 餅田亜希子

参考資料

吃音について取り上げられた新聞記事
吃音に関する参考書籍の案内
NHKハートネット（福祉情報総合サイト）のURL
NHK Eテレ フクチッチ　テレビ信州 news. every のご案内
大阪市社会福祉研修・情報センター発行の「ウェルおおさか」の記事

吃音に関する参考書籍や関連する新聞記事等のご紹介です。
書籍は学んでいただいたことをより確実なものにするためにも、
ぜひお手元に置いていただき、必要な時にいつでも参照して
いただけることをお勧めします。

2021年5月11日 信濃毎日新聞 東信版

ひととき

吃音の悩みない世の中に

東御市民病院の言語聴覚士
餅田 亜希子さん（53） 上田市

「吃音の調子はどうかな」。東御市民病院の敷地内にある専門外来「ことばの外来」で4月下旬、小学校に入ったばかりの男子児童に語り掛けた。言葉をスムーズに発することができない吃音。相手が子どもでも、ずばりと様子を聞く。「保護者から『子どもに吃音のことは言わないで』と求められることもある。でも、本人が正しい知識を持って吃音と向き合うことが大事」と話す。

東京都出身。言葉、言語に興味があり、東京外語大に進んだ。卒業後に言語聴覚士の資格を取得。埼玉県の病院で失語症や高次脳機能障害のリハビリに携わりながら、吃音がある人や家族の支援にも関わるようになった。東御市でも月2回、相談に乗るようになり、2014年のことばの外来設立を機に招かれて信州に移住した。

吃音の相談に乗る餅田さん

吃音はまず「あ、あ、あ、ありがとう」と語頭を繰り返す「連発」が起きる。幼児期に発症することが多い。「親の育て方や家庭でのストレスが原因という人もいるが、根拠のない考え」と強調。2～5歳ごろの発症率は5％、そのうち8割の吃音は消滅するという。

「連発」から症状が進むと「あーりがとう」と語頭を伸ばす「伸発」、「…ありがとう」と最初の音をうまく出せない「難発」になる。進行とともに症状が外から見えづらくなる一方、本人の心理的負担は増えるという。「一見、うまく話せているようでも、頭の中で言いやすい言葉に切り替えている人もいる。周りに気付かれないまま一人で悩んでいる人も多い」と語る。

本人としては自然な話し方ができていないため、うまく社会生活ができない人もいる。ことばの外来では子どもたちだけでなく、70代からの相談もあったという。

「吃音について理解している人が増えれば、自然な話し方として社会に受け入れてもらえる」と考え、市内外での講演など啓発活動にも力を入れる。最近は東御市内の全小中学生に啓発リーフレットを配ることにも関わった。教員や保育士らに理解を深めてもらえるよう、吃音のある子どもへの声掛けや、他の子どもたちに対する説明の仕方を紹介している。吃音の人たちにとって自然な話し方である連発を、話しづらい難発へと悪化させるのは周囲の吃音に対する認識や対応だと考える。

「その人らしいしゃべり方をしてもらうには周りの環境が大事」と訴える。

将来、吃音が特別視されなくなることを望む。「正しく理解した子どもたちが大きくなり、吃音が社会で受け入れられていくといい」。発語の面から多様な人々が悩むことなく自然に生きていける世の中を目指して活動を続ける。

吃音についての研修会で参加者と話す餅田さん（左）

吃音 模擬授業で理解深める

東御で教員ら対象 研修会

東御、上田両市教育委員会は30日、教員や保育士らを対象に、言葉をスムーズに発せられない吃音（きつおん）の研修会を東御市中央公民館で開いた。今回で5年目で、知識を学校や保育園で伝えてもらおうと「実践コース」を初めて実施。症例を学びながら、模擬授業などを通じて吃音の子どもの学校生活について考えた。

約60人が参加。吃音を専門に扱う東御市民病院の「ことばの外来」の言語聴覚士餅田亜希子さん(53)と上田市北小学校で「ことばの教室」を担当する高山祐一郎教諭(35)が講師を務めた。

餅田さんは吃音が最初の音を繰り返す「連発」から、最初の音を伸ばす「伸発」、最初の音をうまく出せない「難発」へ悪化することを説明。当事者の苦しみや悩みが増す一方、周囲は症状が分かりづらくなると指摘し、「連発が吃音の子にとっては自然な話し方。他の子どもたちにも正しく教える必要がある」とした。

2021年12月1日
信濃毎日新聞 東信版

児童たちと吃音について話す高山さん（右から2人目）

吃音の症状 正しく学ぼう

上田市神科小で授業

上田市神科小学校で6～8日、言葉を滑らかに発せられない「吃音（きつおん）」について学ぶ授業がクラスごとにあった。自身も吃音があり、同市北小で「ことばの教室」を担当する高山祐二郎教諭（34）が「吃音はその人らしい自然なしゃべり方」と話し、正しい理解を求めた。

5年2組では約30人を前に、語頭の音を繰り返す「連発」や伸ばす「伸発」などの症状があることや、100人に1人は吃音があることを説明した。少年時代に吃音に悩んだというバイデン米大統領が選挙演説で単語を繰り返した際、日本のテレビ番組で出演者が「ミス」「かむ」と表現したことも紹介。「あまりいい思いはしなかった。大人でも吃音のことを知らない人が多い」と話した。

「吃音の人が自然な話し方をするには、どうすればいいかな」と問い掛けると、児童たちは「気にしない」「（まねをするなど）ふざけない」「最後まで話を聞く」など、それぞれの考えを答えた。

授業後、林真翔（まなと）君（11）は「吃音のある人でも、ない人でも同じように話を聞けるようにしたい」と話していた。

2021年7月9日 信濃毎日新聞 東信版

2023年5月5日 信濃毎日新聞

信濃毎日新聞
1873年（明治6年）創刊
150 信濃毎日新聞 創刊150周年 SINCE 1873
発行所 信濃毎日新聞社
長野本社 〒380-8546 長野市南県町657番地 電話（026） 受付236-3000 編集236-3111 販売236-3310 マーケティング（広告）236-3333
松本本社 〒390-8585 松本市中央2丁目20番2号 電話（0263） 代表32-1200 報道32-2830 販売32-2850 営業（広告）32-2860

©信濃毎日新聞社2023年

2023年（令和5年）
5月5日
金曜日
こどもの日

発　地域面は14・15面
休の霧ヶ峰で火事
ヶ峰高原で大規模な山火事が発た。別荘地には避難指示が発令大型連休の観光客を直撃 19面

国内発
進む少子化 裏付け
子どもの数は前年より30万人少ない1435万人で、42年続けて減少。過去最低を更新した 19面

世界発
二刀流 また一つ偉業
大谷翔平がメジャー通算500奪三振をマーク。100本塁打と併せてベーブ・ルース以来の快挙 12面

吃音で話す 理解広げた中1

私の楽な話し方 分かってほしいです

上田の堀内さん 学年集会で

学年集会で自身の吃音について他の生徒に説明する堀内さん＝4月17日、上田市第五中学校

「自然に出てくる『あ、あ、あ』って話し方が私にとって楽な話し方です」。上田市第五中学校1年の堀内彩友（さゆ）さん(12)は4月17日朝の学年集会で、自身の吃音（きつおん）について同学年の約150人に語った。緊張しながらもしっかりと前を見据え、生徒たちは真剣な表情で耳を傾けた。

話し方が新たな友達にどう受け止められるか、入学前から不安だった。「知ってもらうことから始めたい」と思い、学年集会はその一歩だった。

吃音のある人は「あ、あ、あ、ありがとう」と語頭の音を繰り返す「連発」が自然な話し方とされる。吃音を隠そうとすることが続くと、「あーりがとう」と音を伸ばす「伸発」や音をうまく出せない「難発」に進行する可能性がある。彩友さんは「あ、あ、あ、ってならないように工夫しようとすると苦しくなって声が出せなくなってしまいます。皆さんに分かっていてほしいです」と訴えた。

◇

吃音の多くは2〜5歳の幼児期に発症。人口の5%前後に経験があり、そのうち約8割は自然と症状が出なくなるが、それでもおよそ100人に1人の割合で悩む人がいるとされる。原因は特定されていないものの、人種や言語、文化の違いにかかわらず、吃音になる確率はほぼ同じという。

母親の美加さん(44)によると、彩友さんは保育園の一時期、友達から連発や伸発に触れられ、登園を嫌がった。工夫なのか音程を付けて話したこともあった。美加さんは吃音のある人にとって連発は自然な話し方だ—として保育園や進学先の神科小学校に説明。思いを受け止めた保育士や教員が、教室で他の子どもに説明した。

彩友さんは小学4年の時、低学年の児童から「どうしてそんな話し方なの」と聞かれた。ドキリとしたものの、そばにいた同級生が「彩友ちゃんはこういうしゃべり方なんだよ」と伝えてくれた。「友達が分かってくれていてうれしかった」。小学5年の時には5、6年生向けに吃音を理解するための授業があり、自らの言葉で思いを伝えた。

◇

第五中では入学式に先立ち研修会を開き、教員約30人が吃音について改めて学んだ。講師は自身も吃音のある県小諸養護学校（小諸市）の高山祐二郎教諭(36)。中学時代に同級生からばかにされたりまねされたりして吃音を隠した過去があり「教員や生徒、周りの人が正しく知っていてくれれば安心して過ごせる」と考える。

吃音に詳しい関西外国語大短期大学部（大阪府）の堅田利明准教授によると、過去には「吃音は治すもの」と捉えられていた。堅田さんは、連発は自然な話し方との認識が世の中に広がりつつあるとした上で、周りの人が理解を深めるためには当事者による発信も重要だと指摘。「勇気のいることだが最後は自分しかいない。早くからその力を身に付けることが大切だ」とする。

彩友さんは入学式翌日の7日、同級生の前で吃音を明かした。学年集会での説明も希望。美加さんは、彩友さんがどうすれば他の生徒に伝わるかをじっくり考え、「文章も工夫して練習していた」と振り返る。

第五中には神科小以外からの子どもも通う。中学で新しくできた友人と、連発を隠さず言葉を交わす日々。「分かってもらって、しっかりと話を聞いてもらえる」。勇気を持って踏み出した彩友さんの一歩一歩が手応えへと変わっていく。（縣 和彦）

信州横談

育む夢と温かいエール

きょうは子どもの健やかな成長を願う「こどもの日」。県内各地で取材し、小中高生には自身が描く将来を、大人にはエールを語ってもらいました。あなたも子どもの未来について考えてみませんか。

【記事は14・15面に】

米が0.25%利上げ

【関連記事4面に】

欧州中央銀行（ECB）は4日、理事会を開き、主要政……後の記者会見で「もはや追加的な金融引き締めを見込むとは言っていない」と述べた。

バルブの総合メーカー
KITZ
株式会社キッツ
本社：千葉県千葉市美浜区
生産拠点：長野県伊那市・茅野市 山梨県北杜市

天気 14面で詳しく

北部 6時 12 18 24 / 6日 7日 8日
飯山 29
長野 29
大町 26

中部 6時 12 18 24 / 6日 7日 8日
松本 27
上田 29
佐久 28

南部 6時 12 18 24 / 6日 7日 8日
諏訪 25
木曽 24
伊那 25
飯田 25

5%以上 5%未満

紫外線情報

2024年3月12日 信濃毎日新聞

長門小児童 吃音の理解者に

県小諸養護学校教諭 4～6年生に授業

児童たちの話し合いの輪に加わる高山さん(奥)

長和町長門小学校で、県小諸養護学校（小諸市）小学部の高山祐二郎教諭(37)が、言葉を滑らかに出しにくい「吃音」への理解を深めてもらいたいと4～6年生の各学年に授業をした。同小5年生男子に吃音の当事者がおり、宮島哲也校長(57)が前任校で同僚だった縁から、高山教諭に依頼した。

「おー、おはようございます。こ、こ、小諸養護学校から来ました」。4年生の教室では約30人を前に、当事者でもある高山教諭が音を引き伸ばす「伸発」や繰り返す「連発」の症状を出しながら自己紹介。自身の話し方は吃音者にとって自然な発声だとし、「吃音があるのは大体100人に1人。今は身近にいなくても、きっと出会う時が来る」と吃音を理解する大切さを呼びかけた。

原因がはっきりしていないことや、吃音が悪化する心理的背景についても説明。その後、米大統領選でバイデン氏が連発の症状を出してスピーチする様子を取り上げたテレビの情報番組を見せた。番組内で「これは吃音で、責めるべきでない」という趣旨の発言をした出演者がいたことに触れ、「みんなも吃音の理解者になって」と伝えた。

4年生たちは授業の最後に吃音者が生きやすい社会について、それぞれ考えた。「知らないくせに面白がってばかにするのは駄目。周りの人が吃音を知ろうと努力しなくちゃ」と滝沢美空さん(10)。校外に吃音のある友人がいるという竹之内三怜君(10)は「その話し方のままでいいんだよと伝えたい」と話した。

2024年4月26日 信濃毎日新聞

「吃音」中学生に知ってほしい 上田で当事者ら講演

上田市第一中学校は25日、話すときに言葉がすらすら出てこない「吃音（きつおん）」について学ぶ講演会を開いた。吃音の症状や当事者との向き合い方を正しく理解してもらう狙いで昨年に続き企画した。全校生徒約520人が、東御市民病院の言語聴覚士餅田亜希子さん（56）と小諸養護学校（小諸市）教諭の高山祐二郎さん（37）の話に耳を傾けた。

高山さんは吃音の当事者。吃音は隠そうとすると悪化して言葉が出なくなると説明。自身の症状を吃音と知らなかった中学時代の体験も紹介した。餅田さんは「社会には多数派とは異なる特性を持つ人がいる。その違いを変だと思うような人であってほしくない」と呼びかけた。

「吃音を知っていますか？」と全校生徒に呼びかける高山教諭（右）と餅田さん

講演後、2年生男子（13）は「吃音を知らないことで自分も他人も傷つけてしまった話が心に刺さった。正しく理解したい」と話していた。

堅田利明著
キラキラ
どもる子どものものがたり

もくじ

一　けやき
二　転校生
三　ひげ先生
四　ことばの教室
五　どもる友だち
六　お母さんにインタビュー
七　学習会
八　久しぶりのことばの教室
九　作戦会議
十　お母さんの手紙
十一　夢

「『ボボボ、僕』とか言うな。そのしゃべり方やめろよ」転校してきた哲に突然ことばのことを指摘された新一は、なにも言いかえすことができなかった。やがてクラスのふいんきが変わっていき、新一はどんどんしんどくなっていく。「自分の気持ちをみんなに知ってほしい」― 新一は「ことばの教室」のひげ先生やお母さんとともにクラスのみんなに吃音を理解してもらう作戦を考えていく…。

この物語は、吃音に悩む子どもへのエールです。そして、まわりの友だち、保護者、教師など、吃音の子どもを支援する人が、「どうかかわればよいのか」「なにができるのか」を具体的に記した『手引書』ともなります。

堅田利明著
続編 キラキラ
どもる子どものものがたり
～少年新一の成長記～

もくじ

別れ
中学校に入学
才能と吃音
親の役割
吃音は個性か？
吃音の啓発
喧嘩
高校受験・面接
ひげ先生との再会

ものがたりは、主人公新一が中学生になり、ことばの教室のひげ先生と別れるところから始まります。中学生から高校生にかけて精神的に成長していく新一の姿を通して、学校生活だけでなく社会の中の吃音の問題に目を向けながら、吃音の説明やかかわり方の一つのスタイルを提案しています。ことばの教室のひげ先生の人となり、言語聴覚士の村井先生の吃音観も文章の中に織り込まれています。題材は吃音なのですが、吃音に限らず子育て全般において考えさせられる内容です。園や学校でぜひ取り組んでいただきたいと思うところも記されています。吃音のある人の周囲の人にぜひ読んでもらいたい一冊です。

堅田利明編著

「吃音」の正しい理解と啓発のために ～キラキラを胸に

もくじ

本書を手に取ってくださった方に
キラキラ☆の扉を開けよう！
家族、そして吃音を理解しようとする人から
保育園、小学校の先生たちから
専門の知識を持つ先生たちから
おわりに

文字通り“「キラキラ どもる子どものものがたり」を胸に”、吃音の正しい理解と啓発に取り組んできた吃音のある子ども、吃音を持つ子どもの保護者、教育現場の先生たち、そして、吃音の専門的な知識を持って、吃音の治療にあたる言語聴覚士の先生たち28人による手記が記されています。それらの生の声から、吃音の正しい知識を持つ人が増え、傷つく必要のないことで傷ついてしまう人が減って欲しいという願いが伝わってきます。保育士・保健師・教員・・・子どもに関わる全ての職種の方に読んでもらいたい一冊です。

堅田利明著

特別支援を難しく考えないために ～支援教育が子ども達の心に浸透するように～

もくじ

はじめに
この本を手にしてくださった皆様に
第一章 分かろうとするまなざし
第二章 子どもの気持ちを推し量りながらの食事指導
第三章 吃音を持つ子どもの支援を考える
結び 特別支援の“特別”について思うこと
あとがき

発達障がいについては、書籍も多数発行される一方で研修会も催され、障がいの特徴や対処法も広く紹介されています。しかし、知識が先行するあまり、起こっている現実に即さない対応も多々みられます。そのような現状を間近に見ている著者は、「ちょっとした工夫、視点を変えてみることで解決に導いていけることが思いのほか多い」と感じていました。

本書では著者の臨床経験に基づき、発達障がい、摂食嚥下障がい、吃音のある子ども達との関わり方、対応のヒントを七つの事例とともに具体的に提示しています。

2020年10月7日 信濃毎日新聞 中信版

中信

言語聴覚士 上田の餅田さん・松本の内藤さんが寄稿

吃音 理解広げる一冊に

接し方 支援者の立場から提案

言葉が滑らかに出にくい「吃音（きつおん）」の子どもらへの接し方をまとめた書籍で、ともに言語聴覚士の餅田亜希子さん(52)＝上田市＝と内藤麻子さん(51)＝松本市＝が寄稿した「吃音のある子どもと家族の支援」（学苑社）が出版された。当事者が吃音を苦にせず楽に話せるように周囲がどう理解し、当事者に接すればいいか、支援者の立場から提案している。

本は、吃音が子育てや家庭環境によるものではないことを解説。語頭の音を「あ・あ・あ・ありがとう」と繰り返す「連発」が当事者には自然な話し方で、そのまま安心して話せる環境づくりが大切だと強調している。

餅田さんは東御市の病院に勤務。寄稿では、連発を出さないように意識すると余計に話しづらくなる吃音の仕組みを、日頃から当事者や周囲に伝えていることを紹介。正しい知識を幼稚園・保育園、学校と共有する必要があるという。吃音の子どもへの支援は「どんな大人に育ってほしいかという視点が大切」とする。

松本市内のクリニックに勤務する内藤さんは、小学校などで吃音について理解を広げる出前授業を続けている。寄稿では、当事者がどんな気持ちか考えることを授業で重視していると紹介。取材に「周りが吃音について知ることを通じ、子どもたちが人との違いを受け止めることにつながればいい」と話す。

本は、関西外国語大短期大学部（大阪府）准教授の堅田利明さんと、九州大病院（福岡市）医師の菊池良和さんの編著。堅田さんは「本が、当事者や家族が安心して暮らしていけるきっかけになればいい」としている。178ページ。税別1700円。

吃音の当事者や家族らの支援について寄稿した本を持つ内藤さん

白馬・小谷・大町 統一設置

案内標識・照明案 住民に説明

白馬村、小谷村、大町市の観光振興を図る一般社団法人「ハクババレーツーリズム」（HVT・白馬村）は6日、3市村の街中やスキー場に統一して設置する観光案内標識や照明のデザイン案を、白馬村役場で開いた住民説明会で発表した。北アルプスの景観や自然に調和し、分かりやすさを追求。住民意見を踏まえて今月末にデザインを固め、順次設置していく。

3市村の駅や観光施設、スキー場にある標識は現在、色や形がそれぞれ違う。デザイン案では、総合案内看板やバス停の標識、車を誘導する案内標識は明るさを抑えた濃い灰色を基調とし、文字を白色などにする。スキー場の看板は、コースの難易度別に記号と色で分かるようにする。

照明やベンチなどの構造物は、3市村にモデル地区を設定。白馬村の白馬八方バスターミナ

ルと　じゃ　し、　宿」　した　実　体や　本年　南小　など　け、　る予　ー場　H　「世　事に　けて

白馬八方バスターミナルに照明を設置した場合のイメージ（HVT提供）

2019年12月 NHK Eテレ「ウワサの保護者会」で「気づいて!吃音の悩み」が放送されました。

スタジオゲスト:
菊池良和さん(九州大学)
堅田利明さん(関西外国語大学)

この放送の内容が、NHKハートネット(福祉情報総合サイト)の記事になりました。ぜひご覧ください。
https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/343/

堅田利明・菊池良和編著

保護者の声に寄り添い、学ぶ
吃音のある子どもと家族の支援
～暮らしから社会へつなげるために～
NHK Eテレ
「ウワサの保護者会–気づいて! きつ音の悩み–」
著者出演から生まれた本

尾木ママこと尾木直樹氏推薦!
本書は、科学的な吃音の基礎知識、陥りがちなNG対応例や、本人の意識の持ち方、周囲への理解・啓発の働きかけ方を、当事者や家族への徹底した「共感」と「傾聴」を軸に、丁寧に解説しています。吃音の研究と支援に情熱を注ぐ専門家2氏による好著を、すべての人に強くおすすめします!

2022年5月15日 信濃毎日新聞 全県版

吃音の子ども 自然体で

教育現場の支援例紹介 本出版

吃音の症状がある子どもたちに対する県内外の教育現場での支援例などを紹介する「こどもの吃音症状を悪化させないためにできること」が出版された。上田市や小諸市など東信地方の親子も幼稚園、小中学校でのエピソードをそれぞれ実名で執筆。吃音への理解や啓発を進めていくヒントにしてもらおうと大阪の出版社が企画した。

東信の親子 幼稚園・小中でのエピソード執筆

編著者を務めた関西外国語大短期大学部（大阪府）の堅田利明准教授(58)が吃音について基本解説。本人が抑えようとするほど症状は悪化するといい、語頭の音を繰り返す「連発」から、音を伸ばす「伸発」、音をうまく出せない「難発」へと進行する。悪化に従い外からは症状が見えづらくなる一方、本人の心理的負担は増えると指摘。連発を気にしないで話せる環境づくりの大切さを説いている。

言語聴覚士ら専門家とともに、当事者の親子5組が執筆した。上田市神科小学校6年堀内彩友さん(11)の母、美加さん(43)は、連発が彩友さんにとって自然な話し方だと手紙につづり、保護者向けに配ったエピソードを紹介。学校の理解もあり、昨年、市北小学校で「ことばの教室」を担当していた高山祐二郎教諭(36)が神科小で5、6年生を対象に吃音について授業を開いたことも記した。

吃音の授業で彩友さんが読んだ手紙も掲載。「『あ・あ・あ』ってならないようにって気をつけちゃうと苦しくなるので、話が終わるまで待って聴いてもらえるとうれしいです」と呼びかけた。

彩友さんは取材に「みんなに知ってもらえたから自然に過ごしやすくなった」と振り返る。美加さんは「先生や子どもたちの理解で、話しやすい環境をつくることができた。吃音について広く知ってほしい」と話している。

出版元の担当者は「長野県で行われている吃音に関する教育の試みを他の都道府県にも広げていきたい」と説明。堅田准教授は「一般の教員が吃音について理解し、子どもたちに説明してあげてほしい」と願っている。

海風社（大阪市）刊。A5判、292ページ。2千円。巻末には学校などで活用できるよう高山教諭が授業で使ったスライドを掲載している。

「こどもの吃音症状を悪化させないためにできること」を読む堀内彩友さん（右）と母の美加さん＝東御市

堅田利明編著

こどもの吃音症状を悪化させないためにできること
ー具体的な支援の実践例と解説

わが子がある日突然どもり出したら…

発吃からその後2割の子どもは吃音をもったまま成長するという現実を前提に「吃音を治す」から「吃音を悪化させない」「吃音をもったまま自由にコミュニケーションをとる」といった転換に向けて奮闘する専門家や教育現場の先生方、保護者の実際の支援の例と詳しい解説の書。

解説編は吃音をどうとらえるか、吃音のある子に保護者ができること、保護者と専門家による支援と協働の在り方について述べる。

実践編では就学前、小学生、中学生、成人、それぞれの世代で、本人、保護者、担任の先生、言語聴覚士たちの支援の実際の手記を通して、「吃音症状の悪化とはどういう状態を指すのか」「なぜ悪化させてはいけないのか」に分かり易く答えている。

資料編は実際の吃音理解授業などで使われるスライドなどの資料を紹介していて、自由にアレンジして教育現場でも実際に使うことができる。

目次

はじめに

解説編　堅田利明
Ⅰ吃音をどのようにとらえて、これから何をしていくとよいのでしょうか
Ⅱ吃音のある子どもに保護者ができること
Ⅲ吃音のある子どもと保護者への専門家による支援と協働

実践編
Ⅰ専門家ができる支援・実践について
その子にとって自然な話し方を守り、育てる／餅田亜希子
吃音症状の悪化を防ぐためにー親子と紡ぐ吃音の理解・啓発の輪／西尾幸代
言聴覚士の立場から／田宮久史

Ⅱ就学前の子どもとその応援者
吃音発症／齋藤加奈子
吃音になっても、たくさんしゃべれるようになった／齋藤怜奈
知るとは　つなぐとは／土屋直美

Ⅲ小学生の子どもとその応援者
伝え続けてきて／堀内美加
マネされちゃうと、気をつけちゃうし、もっと話せなくなる／堀内彩友
正しい理解から始める学校づくり／堀内絹予
子どもの成長と共に深まっていった吃音への理解／松下真生・新
新さんと出会って学んだこと／倉澤航

Ⅳ中学生の子どもとその応援者
「盛大につっかえた」と笑って言える環境が得られるまで／前川令
吃音と僕／前川橙士
吃音を正しく理解することで、お互いを思いやることができる／舘林裕ニ
中学校入学準備として私たちが行ったこと／小澤栄子
今のままの僕でいい、と思えるまで／小山田万紀
僕の吃音ライフ／小山田凛太郎
吃音、人との出会いで私が変わったこと／矢崎貴臣

Ⅴ成人の人の経験を通して
吃音で悩んだ経験からお伝えしたいこと／髙山祐ニ郎

Ⅵ吃音の理解・啓発授業の実践
自我が確立していく時期の、本児の自己理解、自己開示を支える教育相談／馬田美紀
連発を出さないように工夫した結果、吃音は悪化する／髙山祐ニ郎

Ⅶ理解・啓発の重要性と様々な試み
寛解後も続ける啓発活動の意義／平林実香
じっくりとお話を傾聴し、吃音の支援ができる専門家を育てる／金子多恵子
ラジオを通して、ふと誰かの耳に届いた吃音の言葉が……／餅田亜希子

資料編

おわりに

2022年10月22日 信濃毎日新聞 こども新聞

信毎こども新聞

吃音って何？どう接すればいいの？

教えて！

言葉がスムーズに出ず、「お、お、おかあさん、み、み、みてー」といった話し方になる吃音。話し方をまねてからかわれたり、本人が吃音を隠そうと意識したりすることで症状は悪化し、不登校などにつながることもあります。吃音の人が身近にいたら、どう接すればいいのでしょうか。10月22日は「国際吃音啓発の日」。東御市民病院の「ことばの外来」で働く言語聴覚士、餅田亜希子さん(54)＝上田市＝に教えてもらいました。

「お、お、お、かあさん…」と話す「連発」が代表的。治そうとすると、症状が悪化してしまう。

Q 吃音ってどんな状態なの？

A 代表的なのは、最初の言葉がなめらかに出ず、「お、お、お、おかあさん…」などと話す「連発」です。

Q 言葉が詰まるのは、見ていて苦しそうだ。

A 実はそうでもなかったりします。本人にとっては、連発の話し方が自然で、楽な場合も多いのです。しかし、「なぜ、そんな話し方なの」と指摘されると、自分の話し方が変だと思い、連発しないように工夫します。最初の音を伸ばす「伸発」もその一つです。それも直さなければとなると、今度は言葉そのものが出づらい「難発」になります。本人が吃音を治そうと工夫することで、かえって症状は悪化し、話すのがつらくなってしまいます。

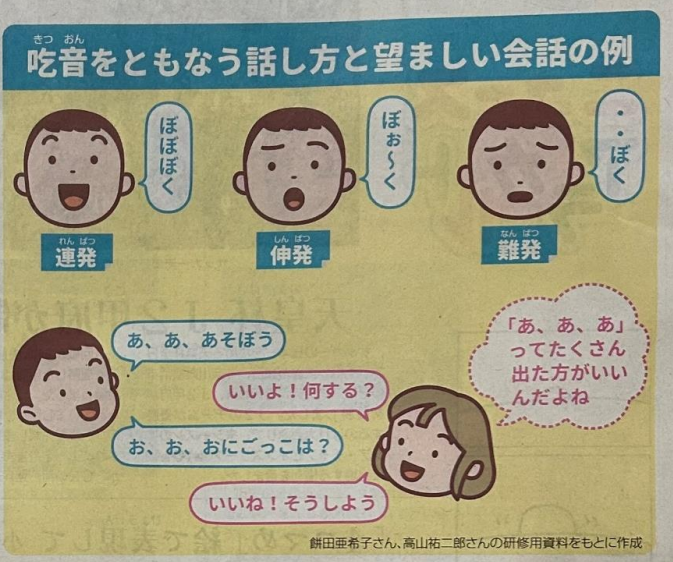
Q 具体的には、どんな問題が起きるの。

A 例えば、授業中に当てられるのを恐れ、いつも緊張した状態になります。言葉がスムーズに出ないため、知っているのに「分からない」と言うことも。算数の九九などは、覚えているのにすらすら言えず、誤解されることもあります。友達との会話も避けるようになり、学校生活が苦しくなります。ただ、本人は声を上げないことも多く、周りから悩みが見えづらいのも特徴です。

Q 餅田さんの働く「ことばの外来」にはどんな人が相談に来るの。

A 子どもを中心に大人も来ます。大人の場合、長い間、悩みを抱えていた人も多く、胸が詰まる思いがします。

吃音をともなう話し方と望ましい会話の例



餅田亜希子さん、高山祐二郎さんの研修用資料をもとに作成

教えてくれたのは

言語聴覚士の

餅田　亜希子さん（上田市）

「みんなが吃音のことを理解すれば、吃音の人は安心して暮らせる。私の仕事がいらなくなるくらい、理解が広がればいいですね」と話す餅田亜希子さん

1968年、東京都生まれ。言語聴覚士。埼玉県内の病院勤務を経て、2014年から東御市民病院の「ことばの外来」で働いています。言語聴覚士や教員、当事者とその親が客観した本「こどもの吃音症状を悪化させないためにできること」（竹田利明編著、海風社）に執筆しているほか、エフエムとうみ（東御市）の番組「吃音ひろば」でパーソナリティーも務めています。

言葉を先取りせず聞こう。理解を広げよう。連発は、その人本来の自然な話し方だよ。

Q そもそも、吃音の原因は何なの？

A 生まれつきの体質的なものが関係しているようです。ただ、詳しい原因は分かっていません。お母さんたちの中には、親の愛情不足や厳しくしつけたことが原因なのでは、と気に病む人もいますが、これは無関係です。子どものころに吃音があっても、8割は自然に治ります。ただ、なぜ治るのか、なぜ治らないのかは分かっていません。吃音の人は人口の1％と言われています。

Q 身近に吃音の人がいたら、どう接すればいいの？

A 普通に会話してください。「こういうことが言いたいの？」と言葉を先取りしないで、話を聞きましょう。連発するのがその人本来の自然な話し方。私たちの「ことばの外来」に来た人がリラックスして、たくさん連発しているのを聞くと、「あー、きょうは調子がいいな」と思います。

Q もっと理解を広げないといけないね。

A そう。まずは本人がこの話し方で大丈夫だと実感すること。その上で、周囲への理解を広げていくことです。私たちは吃音の人たちが安心して暮らせるように、学校の先生や保育士さん、保健師さんへの研修に力を入れています。先生たちを通して、周りの友達が吃音のことを学び、その人の気持ちを想像する。そうすることで、この社会には多様な人がいることに気付けます。ちがいを認め、助け合える社会になればいいですね。

2023年3月24日 信濃毎日新聞 ユースてらす

こども新聞×ヤンジャ

ユースてらす

知っていますか 吃音

周りができることは

ニュースアラカルト WBCで日本が快進撃 2ページ
宇宙のお仕事 ロケットの魅力発信 3ページ
卒業生に贈る黒板アート 4ページ
1ページ

言葉がスムーズに出ず、「お、お、おはよう」などと同じ音をくり返してしまう吃音を知っていますか。音を連発しないように意識するとかえって症状が悪化し、苦しくなることも少なくありません。吃音の人は100人に1人はいると言われ、実は身近な存在です。吃音の人が安心して暮らすために、周りができることは何でしょうか。信毎こども記者は5日、東御市民病院の「ことばの外来」を訪れ、吃音について学びました。

長野市6年 増田 翔和 記者

知ることでみんなが安心できる

吃音は「お、お、おはよう」などと言葉がつまったりする話し方のことです。多くは子どものころに発症し、7～8割は自然に治ります。吃音になる原因はよく分かっていません。昔は吃音は治さなければいけないという考えがありましたが、今はそのままでいいという考えになっています。

小諸養護学校の高山祐二郎先生は学校で吃音についての授業をしています。高山さんも吃音があり、吃音をからかわれたこともあるそうです。以前は吃音を出さないように気を付けて生活しましたがうまく話せず、苦しかったそうです。そんな思いを子どもたちにしてほしくないと、吃音の授業をしています。

吃音の人は日本に約120万人いると言われています。周りの人が理解していると精神的にも楽になります。より多くの人が知ることで、みんなが安心して暮らせる社会になると思います。

クランシェフ

東御市民病院の言語聴覚士、餅田亜希子さん

「吃音の人はどんな気持ちなのだろう」。高山祐二郎さんの呼びかけで、輪になって意見交換するこども記者と保護者。大人にとっても、初めて知ることの多い取材になった＝5日、東御市民病院

小諸養護学校教諭の高山祐二郎さん

上田市5年 北沢 桃奈 記者

坂城町6年 柳沢 蓮 記者

何ができるのか 考えてみて

吃音の人は決して緊張しているのでも、あせっているのでもありません。人それぞれで話し方がちょっとずつちがうように、吃音もその人にとっての自然な話し方です。しかし、目立たないように、変に思われないようにと吃音のことをかくそうとすると、余計な力が入るようになり、悪化していくのだそうです。

私は吃音の人が自然に話せるように、話すのを待つなどできることはたくさんあると思いました。みなさんも吃音の人のために何ができるのか考えてみてください。

お互いを理解し 温かな社会に

今回の取材教室では、保護者の人もたくさん質問をしていました。大人も子ども同じくらい、吃音について知らないんだなぁと思いました。知らないままでいること、知ろうとしないことはこわいことです。なぜなら、無意識のうちにだれかを傷つけているかもしれないからです。

この世の中には、吃音だけでなく、いろいろな個性を持った人がたくさんいます。みんながお互いを理解し、尊重し、大切な存在だと思い合うことが温かな社会になる第一歩だと思います。

信毎こども記者 東御で学ぶ

吃音の経験 先生とこども記者が説明

こども記者は、東御市民病院の言語聴覚士、餅田亜希子さん(55)、吃音の当事者で小諸養護学校教諭の高山祐二郎さん(36)から吃音の基礎知識を学びました。高山さんは子どものころから吃音を隠して生活し、苦しい思いをしてきました。4年ほど前に餅田さんに相談してからは、自分の吃音を受け入れ、吃音を理解してもらうための授業などを実践しています。

取材には、吃音がある上田市の小学3年生、中村誠仁君もこども記者として参加。中村君は自分の吃音のことを調べて手書きの新聞にまとめており、この日はその新聞をみんなに披露しました。

餅田さんが吃音について解説した記事は昨年秋の信毎こども新聞に掲載されています。記事はこちらのQRコードから読めます。

手作りの新聞をほかのこども記者に説明する中村誠仁記者

これがぼくの自然な話し方

待って聞いてくれるとうれしい

上田市3年 中村 誠仁 記者

ぼくが一番知ってほしかったのは、吃音を出さないようにすると、かえって声が出にくくなったり、話せなくなったりしてしまうことです。だから学校にいたり、友達と遊んだりする時にどもってしまっても、話を待って聞いてくれるとうれしいです。これがぼくの話し方で吃音の人の自然な話し方だからです。

ぼくは吃音で困ったことがまだ一度もありません。それは、学校の先生や友達、習い事の先生などみんながぼくの吃音のことを知ってくれていて、安心してどもれるからです。この取材教室で、また吃音について知る人が増えました。とってもうれしいです。

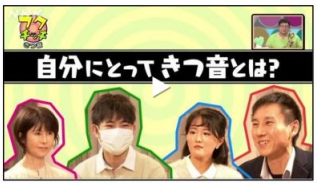
ぼくは「吃音のある自分をどう思いますか」と聞かれたら「これがぼくの話し方。中学生や高校生になった時に吃音がなくなっていても、続いていてもかまいません」と答えます。この紙面で吃音を初めて知った人がいたら、周りのみんなに正しく教えてあげてください。お願いします。

こども新聞サミットに向けて取材

今回の取材は、28日に東京都内で開かれる第6回こども新聞サミットに向けて行いました。サミットは「よりよい世界をつくるためには」をテーマに全国15新聞社のこども記者18人が集まり、信毎からは増田翔和記者が参加します。こども記者はテーマごとに3チームに分かれて事前取材を進めており、信毎は「理想の学校」を考えるチームに入っています。

Eテレ ハートネットTV 「フクチッチ」
きつ音をテーマに放送されました

（1.29前編　2.5後編）



ハートネットTV「フクチッチ」
「きつ音」前編① ～きつ音って何？
当事者たちが経験談を語り合う～

ハートネットTV「フクチッチ」
「きつ音」後編① ～てれび戦士が
「ことばの外来」を取材！～

マイチャン。テレビ信州

2024年3月19日
テレビ信州 news every.で吃音の特集番組が放送されました

社会

そのままの話し方でいいよ…　きつ音への理解深める取り組み続く ありのまま受け入れる優しい社会に…【長野】

2024年3月19日 20:45

大阪市社会福祉研修・情報センター発行の「ウェルおおさか」の記事

特集

どもっている（吃音）子どもたちへの正しい理解と啓発

吃音とは、「どもる」状態のことで、なめらかに話すことができないという意味で「流暢性障がい」とも言われています。吃音は、2~5歳頃からはじまることが多く、このうちの約8割は自然になくなりますが、残りの2割は、吃音を伴ったまま大人になります。現在、吃音のある人は100人に1人で、決してめずらしい障がいではありません。

吃音のある人にとって、最大の問題は、吃音そのものではなく、吃音に関する誤情報が通説として浸透していることです。このため、周囲からの正しい理解を得られないばかりか、吃音の悪化や二次障がいを引き起こしてしまいかねません。

今回は、吃音の正しい理解と啓発のために、私たちに何ができるのか考えてみたいと思います。

「どもらずに話そう」とするほど悪化する

吃音といえば、「ぼ・ぼ・ぼ・ぼくは」のように言葉の最初を繰り返す「連発」がよく知られていますが、ほかに、「ぼーーく」のように言葉を伸ばす「伸発」、最初の言葉が出しづらい「難発」があることをご存じでしょうか。多くは、連発から始まり、周囲から指摘され、「どもらないで話そう」と工夫することで連発が伸発へ、さらに、のどが締め付けられるように、息が詰まる苦しさを伴い、言葉が出づらく身体を使って声を出そうとする難発へと悪化していきます。

吃音のスイッチが入るのは、人と話そうと構えるときで、ひとり言や動物に話しかけるときは、どもることはありません。夢の中で人と話していると寝言でもどもることがあります。また、吃音には波があり、人・場所・話の内容・時期によって変化します。このように吃音と一口にいっても、症状は複雑で個人差があります。

間違った認識が当事者と家族を苦しめる

吃音は、まだ原因が特定化されておらず治療法もわかっていないため、症状に関する理解も十分に広まっていません。親のしつけやストレス、愛情不足が原因といった、さまざまな誤情報が一人歩きし、そのことで周囲からの非難や間違った助言をされた親は、傷つき、孤立感を強めてしまう恐れがあります。

中でも、注意しなければならないのは「吃音について話題にしてはいけない」という間違った考え方です。しかし、この誤情報を信じ、親が吃音に気づかないふりをして、何もしないまま様子をみていては、専門家に出会えないか、出会っても受診が遅れ、症状が悪化してしまいます。専門家による助言・指導を早期に受けることで、吃音の悪化を防ぐことができます。

知ってくれている大きな安心感

吃音のある人とその親が、世間一般に浸透している間違った考えや方法を回避して、正しい情報にたどり着けるかは、将来に大きな影響を与えます。そして、吃音のある人が、症状を悪化させることなく、ありのままで安心して話せる環境を整えることが大切で、そのためには、周囲にいる人が吃音を正しく理解することが欠かせません。

次ページからは、吃音のある子の親の思い、当事者団体の活動、吃音の専門家で言語聴覚士の堅田利明さんには、吃音の正しい知識とそれを広げる意味についてお話を伺いました。

「育て方のせいだ」と自分を責めていた

大阪吃音親子の会　代表 小野　弘美さん

「そのうち治る」と気づかぬふり

「息子に吃音があることに気づいたのは3歳の頃でした。誰かに教えられた記憶はないのに『意識させると治らないから』といった思い込みで、吃音には気づかないふりを息子にしていました」と話すのは、大阪吃音親子の会代表の小野弘美さん。

「マ・マ・マ・マ・ママ」（連発）に始まり、4歳には「マーーーママ」（伸発）と工夫するようになります。小野さんは、「連発が無くなり良くなってきていると思っていた」と話します。小学3年生の頃には、体を揺らして調子を取らなければ言葉が出せない難発が中心の話し方に悪化し、かなりつらそうで、どうしていいのかわからなくなっていました」

それでも、吃音の話をしなかったのは「吃音の話題を息子にすると治らないと思い込んでいたからでした。息子が道で転んだら「痛く無い?」「けがは無い?」と声をかけるのに、言葉が出なくなってしまっていて困っている息子には一言も言えませんでした」

子どもはずっと苦しんでいた

小野さんが大阪市立総合医療センターの小児言語科を受診したのは、子どもが小学5年生のときでした。「息子は吃音に気づいていないと思っていましたし病院に行くのを嫌がるだろうと思いましたが、受診の話を息子にしてみたところ『うん、行く!』と即答でした。堅田先生（P4）に息子を診てもらい、『（息子さんは）もう、とっくに吃音を自覚していますよ』と言われました。思い返せば、意識させてはいけないと思いながらも、『ゆっくり話してみたら』などと意識させていたように思います」

息子は学校で吃音をからかわれていたようでした。

「思うように言葉がでないことに困惑しながら回りの人から笑われたり『ゆっくり話して』などと言われたりする中で、『ちゃんとしゃべらないとあかん』とひとりで抱えて頑張ってきたのだと思います。息子が最も困っていたときに親として話を聴いてあげることができなかった。今でも胸が締めつけられます」

思いをはじめて打ち明けられた

病院が主催する「吃音のある子どもを持つ親の会」という座談会に小野さんが参加したとき、息子さんは小学6年生でした。初めて出会う人たちばかりでしたが、同じ悩みを持つ人たちを前に、旧知に会えた気分でした。

「息子の吃音に気づいてからの8年、誰にも言えなかった思いを初めて口にできたときの気持ちは、いまでも忘れられません」

親子の対話も変わりました。

「以前は、息子の話し方にばかり気が向いてしまって話の中身は二の次になっていました。吃音を理解し、親子で向き合えるようになってからは私も息子もずいぶん気持ちが楽になりました。息子は今35歳になりますが毎日の対話が楽しみです」

自分たちの経験を役立てたい

同じ思いの親たちが集う座談会で元気をもらえた小野さんは、通院する何人かの人と「大阪吃音親子の会」を立ち上げることを決意しました（P3）。

「うちの子は受診が小学5年生でしたが、少しでも早く吃音について親子で話せる場をつくってあげることは大切です。大人になってから就職のときまで吃音の正しい知識と出会っていないというのは大変悲しいことです。就職の面接試験時に吃音について告げることはとてもハードルの高いことです。小さい頃から周りの人に吃音を理解してもらうことを親子で取り組んで行くことが将来のための練習になると思います。私たちができなかったことを、これからの若い人たちにぜひ役立ててもらいたいと願っています」

▲「子ども関係研修「どもった話し方（吃音）のこどもたちへの正しい理解と啓発」での大阪吃音親子の会の活動紹介

一人でも多くの人に吃音を知ってほしい

大阪吃音親子の会

▲子どもたちが、結婚し孫ができていても、苦しみを乗り越えてきたメンバーだからこその絆がある。

専門家も交えた、安心して話せる場

大阪吃音親子の会は、大阪市立総合医療センター小児言語科が主催する座談会『吃音のある子どもを持つ親の会』で出会った親たちの有志により2008年に発足されました。月1回の例会で活動について話し合うほか、大阪と長野で行われる座談会と協働しています。

「例会では、吃音の子どもの親同士で、悩みや思いについて語り合います。専門家を交えた勉強会も開きました。学んだことを家に持ち帰ってもらい、親子で吃音の話ができることを推奨しています。周囲の理解が進まずに苦慮することはありますが、知恵を出し合って乗り越えてきました」と代表の小野弘美さんは振り返ります。

情報過多の時代にこそ、精選された正しい知識を

座談会との協働は、会の発足当初から大阪は14年目、長野で9年目を迎えます。副代表を務める稲田都希代さんは、最近の保護者の傾向についてこう話します。

「今のお母さん方は、ネットなどで吃音の情報を探し、ある程度の知識をもって参加されますが、情報が多すぎるために、何が正しいことなのかがわからなくなっています。だからこそ、正しい知識を整理して伝えることが大切です。これまで、自身の体験を伝えることをしてきた私たちでしたが、14年経った現在は、親御さんのお気持ちをまずはしっかりと聴かせていただくことを大切にしながら座談会に臨んでいます」

活動を通じて親も子も成長できた

子どもとの関わりや吃音に対する考え方など、活動を通じて変わったのでしょうか。

「私にも吃音があります。吃音には色々な症状があるように、捉え方も違う中、話しやすい環境を心がけて乗り越えてきました」(楢田和枝さん)、「言語聴覚士の先生から『この子に吃音さえなかったらいいのにって思っていませんか。いつか吃音を含めてこれが○○君だと思える日が来ますよ』といわれ、向き合って行こうと思えたことを覚えています」(稲田都希代さん)。

「吃音について親子で話し合える関係をつくるためには、親がまず吃音を前向きにとらえることです。それが子どもにも浸透していきます」(片山真澄さん)。

「上の息子が吃音の弟の話を全校生徒に伝えたことがあり、息子は『自分の吃音を知ってくれている人がいることが嬉しいし、そのうえで、なんで?と聞かれるのは、全然ええねん』と言う姿を見て成長を感じました」(梶嵜恵美さん)。

就職時のエントリーシートに吃音があることを書いて挑んだ人もいました。「吃音がある自分をわかってもらったうえで、ほかのことも見てほしいから」「めちゃめちゃ悩んで考えてきたことは、自分の強みになるから自信をもって書く」(村田ゆう子さん)。正しい情報がない中で、吃音の話題を避けてきた親子の歩みとは異なり、自己肯定感がしっかりと高まっているようです。

専門職の啓発に力を入れたい

子どもとは吃音のことも含めコミュニケーションがとれるようになったものの、周囲の吃音の理解・啓発はまだまだ進んでいません。

親子の会では園や学校現場、社会に対する吃音の理解を広める活動を積極的に行っています。「大きなきっかけとなったのは、就職試験の面接のときになってはじめて自分の吃音と向き合うことになって悩んだという人の新聞記事を読んだ時でした。すぐ近くで座談会を開いてきたにもかかわらず、この親子に出会えなかったことに悔しい思いをしました。こういう親子を無くしたいと思い、行動せずにはいれなくなりました」と小野さん。特に理解・啓発を進めたいのが医師、保健師、園や学校関係者などの専門職。専門職の助言は保護者に強い影響をもたらし、子育てに直結します。専門職から「しばらく様子をみましょう」と言われてしまい、何も対処をしないでいることで、親は自身の子育てを責め続け、子どもは人前でどもらないように話そうと努力し、話せなくなってしまいます。正しい知識を親子に届けたい。それには専門職の協力が不可欠です。

あなたも、吃音（きつおん）を正しく伝えてもらうメッセンジャーに

関西外国語大学短期大学部 准教授
竪田 利明さん（言語聴覚士・教育学博士）

長年に渡って誤解されてきた吃音

吃音が始まることを発吃と言います。発吃は幼少期に始まることが多く、そのうちのおおよそ8割の人は何もしなくても吃音が消えてしまうという不思議さがあります。ですが2割の人は吃音とともに暮らしていくことになります。この人の吃音は将来消えるであろう、この人の吃音は残っていくであろう、といった明確な判断はたとえ専門家といえどもできません。そして、吃音を完全に無くすための方法は世界中どこにも存在していないのです。

こうした状況下で吃音が消えてしまった人がたまたま当時行っていた様々な事柄、「習い事を少なくした」「ゆったりした生活を心がけた」といったことが独り歩きして伝わっていきます。吃音の正しい知識がなかなか伝わりにくいのはこうしたことが影響しています。

細かな解明はこれからなのですが、吃音の原因は脳の働きに起因するものと考えられています。ですから、緊張や早口が発吃の原因ではありません。厳しいしつけの結果であるとか本人の性格特性、ストレスが発吃の原因でもありません。

周囲の無理解によって苦しい話し方に

「吃音はそのうち無くなってしまうものだから」という安易な判断で何も対処をせずに「様子を見る」ことを続けていきますと、次第に話しづらくなっていき、やがては声が出せなくなる「難発」が現れてきます。「難発」はたいへん苦しい状態です。2・3歳の子どもであっても「難発」になります。その過程を詳しくお伝えします。

発吃によって最初に現れるのが「あ・あ・あ・ありがとう」のような話し方である「連発」です。本人は、この「連発」を伴った話し方に何ら困ることも無く話し続けます。そのうち、周りの人から「どうしてそんな話し方するの？」と指摘されるようになり、「連発」に意識を向け始めます。ただし、周りの人から一度も指摘を受けたことがなくても自ら気付いて意識し始める人もいます。その結果、「連発」を出さないように話そうと工夫を始めます。「あーーーりがとう」と伸ばして言う「伸発」が出現してきます。やがて「伸発」も指摘されるようになり、本格的に気を付けて話そうと頑張ります。すると、「連発」「伸発」を伴わずに言えるようになります。気を付けて話さなくては、という思いはさらに高じていきます。すると最初の言葉がスッと出てこなくなる「難発」が現れるようになります。出しにくい言葉を何とか言おうと足を踏み込んだり手を振り下ろしたりする随伴症状も現れてきます。苦しさのあまり別の言葉に言い換えて話したり、話すことを避けようとしたりします。顔を真っ赤にして絞り出すように話すわが子の姿や園や学校を行きしぶるようになって初めて保護者は専門家のところに子どもを連れていきます。他方、言い換えを巧みに使いながら工夫をすれば周囲の人は気づきません。ですが、いざというときに声が出せず、将来の不安も重なり「こんな簡単なことも言えない自分なんてダメだ」と自尊感情が失墜していきます。吃音の複雑化による「二次障がい」です。

吃音のある人にとって、吃音を伴った話し方は自然なもの

吃音の最大の問題は、吃音を伴った話し方を本人も周囲の人も直さなければいけないものだと考え、それを実行することです。発吃によって現れる「連発」を伴った話し方は、言いづらいわけでもなく、正さないといけない誤った言い方でもありません。発吃後、本人が「連発」に気付いているかいないかにかかわらず、保護者や周りにいる先生・大人が本人に、「連発を伴って話しても大丈夫」「連発を出さないようにするとだんだん声が出なくなってしまうんだよ」と教えてあげてください。吃音のある人の周りにいる人達にも同じように教えてあげます。それがあって吃音のある人は、吃音を伴った自然な話し方を安心してそのまま話し続けてくれます。

自然な「連発」はその後、増えていくことはありません。いざという場面では「連発」を伴わずに言うことも容易です。なによりも、苦しい「難発」になってしまうことを防止できます。このように吃音は早期からの周りの理解に加え、吃音に対する自己理解を育てていくことが必須なのです。何もしないで「様子を見る」ことは、「難発」によって声が出せなくなってしまう不安をより一層高め、自尊感情に影響をもたらし、思春期の人格形成にも重大な事態を引き起こしてしまう可能性があるということを知っていただきたいのです。なんとかごまかしながら過ごしてきた学校時代から今度は社会人として独り立ちしていかなければなりません。「大人になれば何とかなるから」に当てはまらない人たちがいるのです。

幼少期の子どもに会う機会が多い方々が、吃音のある子どもにはもちろん、その保護者・家族に、周りにいる人たちに正しい吃音の情報を伝えていってくださるメッセンジャーになってくださることを願っています。